

都市における伝承と調査

倉石忠彦

-
- | | |
|------------|--------------|
| 1. 問題点の所在 | 3. 都市の民俗 |
| 2. 都市把握の方法 | (1) 民俗と民俗資料 |
| | (2) 都市の民俗の視点 |
-

1. 問題点の所在

民俗学において、その対象とする地域は、かつては村落が中心であった。ところが近年、都市を対象として民俗研究が行われることも多くなった。そして民俗学の調査研究において、少なくとも都市を無視してもよいと考えることはまずなくなったといわれてよいと思われる。

もちろん、民俗学において、都市を対象とすることが、これまでも全くなかったというわけではない。明治以降、例えば坪井正五郎が東京およびその近郊において、和服から洋服にどのように変化しつつあるかを観察・調査をしたものも考慮するならば、それは明治20年にさかのぼることができる。もっともこれは日本における人類学の草創期のことであり、しかもこれは今和次郎の考現学につながる成果であるとし、民俗学は柳田国男の業績を待たなければならないとすれば、『時代と農政』⁽³⁾において都市をとりあげており、これは明治43年のことである。これ以降『明治大正史世相篇』⁽⁴⁾などで折にふれて注目している。森口多里なども関心を払っていた。⁽⁵⁾

しかしこうした成果は民俗学の研究成果からすれば、主たる関心であるとはいえず、やはりその中心は村落、とりわけ農村であった。それは日本民俗学という新しい学問を体系だてるために水田稲作を生業基盤とする村の民俗に目を奪われていたからである。もっとも当時の日本においてその民俗文化を支えているのは稲作農民であることは、それ自体、実態とそれほど差のない状態であり、妥当な見方でもあったのである。そうした段階で取り上げられた都市というのは、村の民俗を理解するための方便としての性格をもつにすぎなかったのも、また止むを得ないことであったの

である。

ところが、昭和40年代半ば以降、民俗学の対象とされた都市はいささか趣が変わっている。それは昭和30年代の高度経済成長の波が全国に及び、相対的に農業の地位が低下し、農村の社会的に果たす役割が弱まった。またTVが全国的に普及するなど、いわば都市化が全国的に進展し、かつての村落生活が大きく変貌してきたという状況をふまえているからである。

このようななかで取り上げられた都市は、まず民俗学のフィールドの拡大という意味をもっていた。農山漁村だけを対象としていたのでは、民俗学は先細りになってしまふという危機意識に支えられていたのである。でき得れば村落を対象としたいのであるが、それができないから止むを得ずその研究対象を拡大したという性格をもっていた。したがって都市に対する根本的な研究態度としては、村落に対するものと全く相違なかった。そうした意味からすれば、それは非常に消極的な姿勢であったということになる。

しかし、都市という空間を研究対象にすることになると、日本の民俗社会に、ムラとマチという二つの異なった空間があったということに改めて気づかされるのである。ところが従来民俗学は、一方のみの空間に目を注ぎ、それによって日本の民俗文化、あるいは基層文化を把握しようとしてきたということが出来る。だが、日本に二つの性質の異なった空間があるということになるとムラという空間のみによって再構成され、その上にたって体系だてられた文化は必ずしも充分なものであるとはいえないことになる。マチという空間の民俗—それはマチという性格を持った民俗をも含むものであるが—を考慮することによって体系を立て直す必要があるのである。そこで従来の民俗学の体系を補完するために、都市を対象としようとする見方が生まれるのである。

これは、フィールドの拡大という考え方に比較すれば、都市の役割としては、かなり積極的にそれを認めている。だが従来の民俗学の体系の内部に止まっているのである。そうした点からすれば、民俗学の体系を補完するというこの考え方も、まだ都市それ自体の存在を充分に取り上げられているというわけにはいかない。すなわち、このほかに、都市独自の民俗学の体系を把握しようとする問題意識が存在するのである。ムラにはムラの生活があり、非生産的な生活を営むマチにもそれなりの生活がある。民俗の体系をそうしたものの上にたって把握していく必要があると思われる。結局、民俗学で都市をとりあげようとするときには、この三つの視点が存在するということができるであろう。

こうした視点のどれに重点をおくかということは、個々の研究者の問題意識とかかわってくる。そしてそれはどのような視点でなければならないというものではない。ただ都市的生活様式の全国的な進展によって「都市」というものから目をそむけてはいられなくなったという一般的な状況は存在しているのである。そして、そうした状況下において従来の村落を研究対象にしていた民俗学の枠でとらえられない、とらえきれないという事情もまた生まれている。農村に立脚した民俗学から見れば、その枠内に収まらないがゆえに都市は民俗学の対象になり得ないとする考え方もないわけではない。特に都市に果たして民俗学の研究対象である民間伝承が存在するかどうかという疑問は根強い。民俗学の研究対象が存在しなければ、そこには民俗学もまた存在しないと考えるのである。果たして都市に民間伝承は存在しないのであろうか、あるとすれば、それはどのようなものであろうか。またこうした研究対象として取り上げる都市とはどのようなものなのであろうか。そしてその都市をどのように把握することが可能なのであろうか。

2. 都市把握の方法

都市（マチ）は村落（ムラ）に対する概念であって、まずは空間認識の上にとって認識されている。もちろん都鄙連続体論を全く否定するというのではなく、都市と村落とは相互に深いかかわりを持ちつつ存在し、柳田国男のいう都市と農村とは従兄弟の関係にある⁽⁶⁾ということを認めつつも、都市という有機体の正体を明確にするために都市を村落に対置して考えてみようとするのである。

するとこの空間は村落空間とはかなり異なった性格をもっていることが明らかとなる。すなわち村落空間においては均質的な空間⁽⁷⁾であって、その空間がハレとケの転換を行うのに対し、都市においてはハレとしての非日常空間が存在するとともに、空間は機能分化している。すなわち、居住地空間、職域空間、盛り場空間という三つの機能空間と、それらを結ぶ移動空間⁽⁸⁾であって、巨大都市においては、この移動空間が独自の空間と機能とをもっていると思われるのである。つまり都市の独自性の一つの姿がここにみられるのである。

それでは都市を見る場合、どのような視点から見るべきなのであろうか。それは対象とする都市的空間によっても相違する。例えば近世都市、現代都市、巨大都市、小都市、伝統的都市、新興都市など、それぞれの性格によって、そこに展開する生活に多少なりとも差があると思われるからである。しかし、それらを通して共通に対象と

することができるものがある。すなわち、人々の生活であり、個々人の行為や意識である。それらは大衆小説や映画、演劇、TVなどに現れるものを材料とすることもできる。特に都市においてはさまざまなコミュニケーションが発達し、人々との間に情報の交流がなされ、そこに共通の認識が形成されていく。そして、個人の意識が強く、それが集団とどのように関係しあっているのかという点などは都市を考える上に非常に重要な点である。ともかく、都市を対象とする場合には、従来ムラを対象としていたのと同一の内容で臨んでも効果の薄いことが多く、都市の中から都市独自の内容を取り出さなくてはならないことになる。

そうした立場から都市を見ようとすると、とりあえず二つの見方が考えられる。一つは通時的な見方であり、他の一つは共時的な見方である。通時的な見方は歴史的関心に基づく見方ということもでき、時間の経過とともに変化する、いわば変化・変遷に主たる関心があるものである。具体的には、都市の生成発展がどのようになされたかという点をおさえつつ、生活の変化をたどるものである。したがって都市化—都市的生活様式化をどのようにとらえるかということともかかわる。それは、都市化というものが、ムラの生活の都市化であるとともに、マチの生活の一層の都市化もまた都市化であるからである。⁽⁹⁾都市の生活がどのように変化したかをたどるものである。

これは生活だけではなく、民間伝承においても同じことがいえるであろう。ムラの民俗がマチに入って都市化される。あるいはムラの民俗が、ムラが都市化されることによって変貌する。あるいは都市内における生活の中から、習俗化するものが生成してくる。こうした都市化の民俗などは通時的なものといえるであろう。

通時的な見方にもう一つ、都市に生活する一人一人の歴史を明らかにすることによって都市を把握しようとするものがある。いわゆる生活歴、つまりライフヒストリーに注目するものである。個人の体験から都市の実態を明らかにし、都市の歴史を把握しようとするものである。

共時的な見方というのは、変化を主たる関心の対象とするものと異なり、事象を分析することにより、その社会の性格を明らかにしようとするものである。通時的関心を歴史的関心と言い換えることができるとすれば、共時的関心は社会的関心ということができるであろう。これは、過去から現在までの流れをたどるわけではないので、現在という一定の時間の中で生起する事象を対象とすることになる。そして、それはまず都市的な生活様式の把握から始まるであろう。

ムラのように第一次産業を生活の基盤に据えている所の生活と、マチのように第二次・第三次産業を主たる産業としてそこに展開される生活とは、自ずから相違がある

からである。それは生産的生活と消費的生活の相違ということもできよう。そしてその消費的生活こそマチ的な生活のまず目につくところのものであり、そこに生活するサラリーマンは、かつてムラにはほとんど見られない人々であった。あるいはまた現代の浮浪者もマチ的生活の中から生まれてきたといってもよいものであろう。⁽¹⁰⁾それらを通してマチを把握しようとする。芸人の生活であるとか、職人の生活であるとかもこうしたものの中に入れてみることができるであろう。また、こうした都市に生活する人々は、生産の場としての土地と切り離されているため、定着度が低く、いわゆる都市漂泊の状況もみられ、これもまた都市的生活の様式の一つであろう。

また、都市に生活する人々は自らの生活リズムを持っている。村落における人々にも生活リズムはあるが、そうしたものと共通点を持ちつつも、都市のリズムとして独特のものを持っている。これを仮に都市の生活暦と名付けておく。この生活リズムは生活様式と深く関わるが故に、日常生活の展開を把握するのに有効なものと思われる。⁽¹¹⁾このほか共時的関心の対象になり得るものは、日常的な都市空間において生起するあらゆる諸現象であって、都市の世間話なども好個の事例として、近時民俗学でも取り上げられることが多くなった。⁽¹²⁾

たとえばこうした形で都市というものを把握することができるとする。しかし、民俗学における都市の研究はここから先なのである。つまり把握した都市において、どのような伝承的生活が営まれ、伝承的文化が存在するかなのである。都市を把握したのも、そこにある伝承を把握するための一段階であったといってもよい。したがって、都市を通時的・共時的に見るといっても、実は都市の伝承を歴史的・社会的に見ることであったのである。民俗学において都市を取り上げるというのは、やはりそこに存在する民間伝承を取り上げるということであると理解するためである。

3. 都市の民俗

(1) 民俗と民俗資料

民俗学の研究対象は民間伝承である。そして民間伝承は我々の生活の全分野にわたって、生活の中に存在し、それを支える人々によって伝承されている。民間伝承は伝承母体とも呼ばれる集団において保持されるものではあるが、その集団を構成し、維持しているのは個々の人々である。その集団による規制をうけながらも、具体的な習俗を伝承しているのは個々人であろう。それらの人々の集合体が示す民間伝承は当然

存在するが、伝承体は個人と考えてよかろう。もちろん民間伝承というものは個人のみが単独で保持しているものではない。しかし、研究者、調査者が民間伝承として得ることのできるものの多くは個人の伝承を基礎としている。そうした伝承者の生活のあらゆる側面に伝承は存在する。そうであるならば、伝承の満ち満ちている生活の場に生活する人は誰でもが伝承者であるということができる。

民俗学はそうした民間伝承を資料として研究を行う。全生活分野に存在する民間伝承を研究資料とするためには、研究に必要なものを取り出してこなければならぬ。民間伝承全体を研究対象にするといっても、具体的なテーマを取り上げて研究する。その場合には、そのテーマに沿ったものを取り上げ、それを対象とすることになる。民間伝承の一部を資料化するのである。全生活分野に含まれる民間伝承の一部を切り取ってそれを定着化するといってもよい。資料というからには一定の形を持っておらねばならず、客観性が要求される。そこに定着化が必要になるのである。したがって研究の対象としての資料は定着化・客観化の結果として文字化・映像化・音声化され記録されるのである。それはまた固定化でもある。ことば・行為・観念・器物などによって示されるものを、これこそが民間伝承であるという一定の認識のもとに切り取り固定化するのが民俗資料であると考えることができる。

民間伝承は、人々とともにあって、生きているものである。伝承者や様々な条件によって民間伝承は異なった姿を示す。そういう点からすれば、民間伝承はうつろいやすい性格を持っているといってよいのかもしれない。それを研究対象とする場合、民俗資料という形で一定条件下に固定されるのである。どういう条件下にどの部分を固定するかということは調査者に任されている。調査者・研究者の視点と認識によって異なる。つまり非常に個人の問題意識の強く働くものである。結局、全生活分野に及ぶ民間伝承の、どの部分をどのような形で取り出し、研究の対象にするかということは、研究者の姿勢にかかっているのである。民間伝承を客観化するためには研究者の主観が大きな役割を果たしているのである。

そのうえ民俗調査というものは、自然科学などの調査によるような、調査者による外部からの一方的な働き掛けによって行われるものとは異なっている。伝承者とのれ合いのなかから、教えてもらおうという形で、相互信頼の上になたてなされるものであり、そうした意味では民俗資料はまさに「共同して作り上げる」ものなのである。伝承者がいなければ民間伝承は存在しないが、民俗学においては調査者がいなくてもまた民間伝承は存在しないという一面をもっている。

ここにおいて、民間伝承は客観的な存在として民俗学の研究対象にされてきたので

あるが、実はきわめて個性的な主観の強いものであるということになるのである。そしてこれこそが民間伝承であるとして、生活の中から一定の視点のもとに取り出されてきたもののみが、「民間伝承」として認識されるという傾向もまた認められるのである。そして「これこそが民間伝承である」という認識は、民俗学の研究史の上で形成されてきたものである、ということもまたいえるであろう。⁽¹³⁾

つまり民間伝承といわれるものは、日本民俗学の研究史においても江戸時代の屋代弘賢の「風俗問状」⁽¹⁴⁾から始まり、明治にいたり、人類学会の活動などを経て、長い年月のなかでそうした内容はしだいに整備されてきた。⁽¹⁵⁾そして近年はかなりの批判を浴びることになった『民俗調査ハンドブック』⁽¹⁶⁾は、その一到達点であると思われる。しかし、ここに至って、民俗調査は調査者・研究者の問題意識に基づいて行われていたものが、外から与えられた、お仕着せによって行われるようになってしまったのである。そして、これらに取り上げられた民間伝承の認識というものは都市的生活様式の卓越したいわゆるマチや、現代の巨大都市・新興住宅地などの生活をその視野にいれたものではなかった。したがってそこに都市的生活様式にかかわる民間伝承はほとんど取り上げられていないのは当然なのである。

こう考えてくると、都市に民間伝承は存在しないとするのは、単にそこに民間伝承を見ようとしなないということにすぎないのではないかと思われる。民間伝承を認識しようとしていないということになる。しかし、都市の文化も村落の文化と並んで民族の文化を構成しているものである。そしてそうした文化はまた過去の伝承的文化を踏まえて成立しているものであると考えれば、都市の生活に民間伝承が存在しないはずはないのである。それでは都市の生活の何を民間伝承とみることができるか、実際の調査に基づいてそのいくつかを例示してみよう。

(2) 都市の民俗の視点

「都市」と称されるものが、どのようなものを指すか、調査者・研究者によって相違するとはいえ、特定生活空間を指す場合があるのは事実である。そしてそうした空間は、長い年月にわたって自然に形成され、維持されてきただけでなく、短期間に形成される場合もある。新興住宅地などと呼ばれるところである。都市への人口集中にしたがってこうしたところは各地にみられる。そしてそこはいつしか町として人々の生活する場を作っている。それは自然に発生したのではなく、意図的に作られる場合が多い。そうしたことを考えると民俗的なものは入り込む余地はないかのように思われる。しかし、人々が生活する場である以上、そこに人々の意志は働いている。人

々がその意志を行使する過程に伝承的なものが介在することがあるかと思われる。そうした点から、一つの町が、たとえそれが行政的な町であっても、それが成立する過程に注目してみると次のような事項から伝承性を見出すことができよう。

A. 新興住宅地の形成

- (1) 住宅地が形成される以前の道筋・川・祠・塚などはどのようなようであったか。現在そこはようになったか。
- (2) 住宅地になり始めた時期とその契機はどのようなようであったか。
- (3) どの辺から家が建ちはじめ、どのように広がっていったか。
- (4) 家と家とのつきあいはどのようにして始まったか。引っ越しのあいさつほどの範囲の家にどのようにして行ったか。
- (5) はじめはどの自治会（町会）に加入していたか。最初から独自の自治会（町会）であったか。
- (6) 単独の自治会（町会—新しい町）になったのはいつか。
- (7) 自治会（町会—新町）が独立したのはどのような理由か。どこで提案されたか。それに対する対応はどのようになされたか。
- (8) 自治会（町会）が独立するまでの経過。どこでどんな話合いがなされたか。
- (9) 自治会（町会）の名称はどのようにしてつけられたか。
- (10) 単独の自治会（町会）になる以前に加入していた自治会との関係はその後どのように変わったか。行事などへの参加状況・意識など。
- (11) 特に関係の深い自治会（町会）はどこか。どのような理由で、どのような関係があるか。どんな事をするか。
- (12) 新しい自治会で始めたものにどんなものがあるか。神社の創設・祭りなど、特に地域集団の精神的支柱の存在に注意する。

これは自治会（町会）そのものについての調査事項ではない。それは社会的生活をどう行うかという視点から別に考えられるものであろう。社会的生活を行う上で一つの単位となり、日常生活の上でなにかと関わりを生じ、社会集団として機能する集団の成立の課題に関わるものである。もちろん自治会とか町会とかと呼ばれるものが、行政組織の末端に位置し、そうした地方公共団体等の規制を受けたり、下請的な仕事を行っていたりする場合も多い。そうした位置付けを考えると、自治会（町会）成立には伝承性は希薄である。ただ、そうしたものを人々がどう受け止め、あるいは働き掛けるかという点には、伝承的なものがみられるであろう。それは村落において、自分たちのムラをどのように認識していたかということがあるのと同様に、町において

自らの地域社会をどう認識するかという問題意識が存在すると考えるからである。⁽¹⁷⁾

団地を含む新興住宅地に生活する人々は、村育ちの人が多く、町育ちの人がいないわけではないが、団地や新興住宅地がマチとしての性格をもっていると考えられるから、そこに新たに生活するようになった人は地方出身という性格を多分にもっている。そうした人々が新たにマチをつくるのである。そしてそこで営まれる生活はそれ以前と多かれ少なかれ変化する。一種の都市化である。一体何が、どのように変わるのであろうか。こうした視点も存在する。これはマチにおいて生成したものもあり、それらをも含むが、まずは変化の相を明らかにしようということになる。したがってこの場合、従来比較的多く問題にされ、資料も多く集められているような事項を対象にすることになる。

B. 団地における民俗の変貌

- (1) 住宅形態 ① 一戸建て ② 棟続き(何戸続き) ③ 鉄筋中高層 ④ 高層
⑤ その他
- (2) 入居期間
- (3) 家族構成・職業
- (4) 団地内の交際範囲 ① 両隣 ② 同一階段 ③ 同一棟 ④ 同一内職 ⑤ 職業・勤務が同一 ⑥ 子どもが同年齢 ⑦ 妻の世代が同一 ⑧ 宗教が同一
⑨ その他
- (5) 宗教 ① 宗派・寺 ② 墓 ③ 仏壇 ④ 神棚 ⑤ 屋敷内に祭ってある神
- (6) 祭り ① 参加の有無 ② 祭りの日・祭りの名称
- (7) 正月 ① 正月を過ごす場所(団地・夫の実家・妻の実家・その他) ② 正月にすること(松飾り・鏡餅・初詣・その他)
- (8) 盆 ① 盆を過ごす場所(団地・夫の実家・妻の実家・その他) ② 盆にすること(墓参り・盆棚・その他)
- (9) 団地でする年間の行事にどのようなものがあるか(現在しているもの・団地にはいる以前はしていたもの・子供のころしたことのあるもの・親から聞いたことのあるもの・名前だけは知っているもの)
- ① 若水 ② 雑煮 ③ 初詣 ④ 七草 ⑤ 鳥追い ⑥ トンド ⑦ 二十日正月 ⑧ コト八日 ⑨ 針供養 ⑩ ヒナ祭り ⑪ 花祭り ⑫ 祇園 ⑬ 五月節供 ⑭ 七夕 ⑮ 盆 ⑯ 月見 ⑰ 十日夜 ⑱ 大師講 ⑲ 餅搗き ⑳ 松迎え ㉑ 煤掃き ㉒ 年越し ㉓ その他
- (10) 団地でするお祝いにどのようなものがあるか(現在しているもの・団地には

いる以前はしていたもの・子供の頃にしたことのあるもの・親から聞いたことのあるもの・名前だけは知っているもの)

- ① 七夜 ② お宮参り(詣る所) ③ 食い初め(何日目) ④ 初誕生(すること)
⑤ 七五三 ⑥ その他

(11) 地域社会の祭りに参加するか。

(12) 贈答はどの範囲の人々にどのようにするか。お返しはどのようにするか。

- ① 結婚祝 ② 出産祝 ③ その他

(13) 一日の時間配分はどのようにするか。

(14) 食生活(食具と献立)

(15) 衣類(種類と着用の機会)

これは地方の団地を調査したときの項目である。⁽¹⁸⁾したがって調査地やその状況によって項目内の事項などは随時変更することが必要であろう。B-9)の年中行事などは特に調査者の関心などによって重点をおく行事が違ってくるであろう。B-4)の交際範囲も団地内社会の状況をまずみようということで、こうした視点を考えたのであるが、団地住人の交際そのものを見ようとすれば、当然団地外の人々との交際もみなければならぬのであろう。もちろんその交際は友人関係だけではなく、親族・姻族などとの関係も含まれ、それはB-7)の①、B-8)の①などで見ようとす、あるいはB-12)なども同様である。こうしたものを通して団地の人々の行動なども垣間見ることができる。しかしともかく、かつて実施していた行事などが団地という新しく形成された社会においてどのように展開されてきたか、というような視点から例えばこのようなものが考えられるであろう。

そしてこうした視点から見れば、習俗はまず環境に左右されて、必然性のないものから失われていく。生業に関わる年中行事などはその最も大きなものである。年間のリズムに関わるものがあるとしたら、制度的な祝日や学校の休み、そして商業的なもの影響によってであり、行事それ自体のもつ影響は少なくなっている。その割には通過儀礼に関わるものは変化が小さいというような状況を示す。少なくとも民俗事象の変化の相を見出すことができよう。

こうした団地や新興住宅地は外見的にはどこもそれ程相違はない。そのために個性的でないと考えられている。確かに居住空間としての住居は画一化され、類型化されている。しかもその地域に居住する者は他所者同志である。その人々の出身地にしても特に同一地方に集中しているというわけでもない。その上、その地域に、団地などが新たに建築されたものであるならば、そこに伝統的な生活が地域として伝承されて

いたわけではない。こうした地域にどのようにすれば、地域独自の伝承的生活が形成されるのであろうか。果たしてそのようなものがあるのであろうか。しかし、この程度の目安で調査してみても、そこにはある程度の地域性が認められるのである。⁽¹⁹⁾ ということは、その地域に独自性を持った生活が営まれているということになる。そして、それが伝承的な民俗事象に及んでいるとしたら、そこに地域的な伝承性を見出すことができるのではなかろうか。

ここに上げた視点はほんのその一部である。都市の民俗の存在を知るという点からすれば、村落の民俗との連続性の上にたっているということができるともかもしれない。都市独自の民俗はまたそれなりの視点が用意されなければならない。そうした意味では町に居住する商人や職人の存在に注意することも必要であろう。そしてその場合、単に技術伝承のみにとどまらず、その生活全体に及んで注意することが必要であろう。そしてその中から都市の民俗と呼べるものを見出す過程で生活史あるいは生活誌を作成してみるのも効果的であると思われる。こうしたものが民俗学の中で意味をもってくるのは、個人の生活であってもその背後に同様の生活を営む多数の人々があり、それらの人々の生活とそこに流れる意識を見ようとすることによってである。その何が民俗であるかはそうしたものの類型化や当人たちの認識によってである。⁽²⁰⁾

したがって視点は現在のように都市に対する関心が拡散している段階では調査者・研究者の数だけあるといってもよい。こうした現状においては、都市の民俗を把握する視点を性急に絞り込むことは適当ではない。⁽²¹⁾ 更に多くの調査と研究を積み上げていく必要がある。そうした意味ではより一層都市の生活文化を対象とした調査・研究が推進されることが必要であると思われる。そうすることによって、民俗学は新たな展開を見せられると思われる。ことによるとその結果、従来の民俗学における枠組みを検討しなおさなければならなくなるかもしれない。しかし、現在学としての民俗学は、それを恐れてはならないと思う。きっとそこに新たな日本の民俗文化像が出現してくるであろうと思われるからである。

なお、ここにとりあげたのは、都市的空間を中心にしたものである。これ以外にいわゆる都市的生活様式に基づくものを「都市」として把握する視点もある。それは自らまた異なった内容を考えなければならない。それらに関するものについては稿を改めたい。

註

- (1) 坪井正五郎「風俗漸化を計る簡単法」『東京人類学会報告』第14号 明治20年

都市における伝承と調査

- (2) 今和次郎『考現学』今和次郎集1 ドメス出版 昭和46年
- (3) 柳田国男『定本柳田国男集』第16巻所収
- (4) 柳田国男『定本柳田国男集』第24巻所収
- (5) 森口多里『町の民俗』三国書房 昭和19年
- (6) 柳田国男『都市と農村』『定本柳田国男集』第16巻所収
- (7) 福田アジオ氏は村落構造をムラ・ノラ・ヤマの三空間が同心円状に展開しているとして述べている。しかしそうしたいわば生態的景観というようなものからではなく、ハレとケという視点から見たとき、やはり村落空間は均質であると思われる。
- (8) 倉石忠彦「都市空間覚え書き」『長野県民俗の会会報』9 昭和61年
- (9) 倉石忠彦「民俗学における都市の概念」『国学院雑誌』85-3 昭和59年
- (10) 山折哲雄『乞食の精神誌』弘文堂 昭和62年
- (11) 倉石忠彦「生活暦の展開と構造」『日本人の民俗の時間認識に関する総合的研究』(昭和60年度科学研究費補助金—総合研究A—研究成果報告書)
- (12) 前掲注(5)などでも扱っているが、そのみを扱ったものとして宮田登『妖怪の民俗学』(岩波書店 昭和60年)はその早い時期のものである。
- (13) 福田アジオ『日本民俗学方法序説』(弘文堂 昭和59年)でも246p以降でこの問題について触れている。
- (14) 中山太郎編著『校注諸国風俗問状答』東洋堂 昭和17年参照
- (15) 例えば福田アジオ「日本民俗学研究史年表」(『国立歴史民俗博物館研究報告』2 昭和58年)など参照
- (16) 上野和男他『民俗調査ハンドブック』吉川弘文館 昭和49年(新版昭和62年)
- (17) こうした視点からのものに『大町市史第5巻民俗・観光』(昭和59年)があり、『市街地の民俗—伊勢崎市史民俗調査報告書第6集』(昭和61年)においてもこの視点から調査した部分がある。
- (18) 倉石忠彦「団地アパートの民俗」『信濃』25-8 昭和48年
- (19) 倉石忠彦「団地と民俗」『加能民俗研究』10 加能民俗の会 昭和57年
- (20) 『市街地の民俗—伊勢崎市史民俗調査報告書第6集』においても、そうした視点から買継ぎ商人の生活や商店の主婦の生活を取り上げてみた。そしてそれによって生活を浮き彫りにするだけでなく、価値観なども見出そうとした。
- (21) 『都市民俗学へのいざない—混沌と生成—』『都市民俗学へのいざない—情念と宇宙—』(雄山閣 平成元年)においてとりあげられているものも、世間話・家・行事・信仰・芸能などと呼んでいた項目に関わるものほか、酒・盛り場・世相・まんがなどに関わるものも扱われており、その関心の多様さは充分従来の民俗学の枠を破っている。しかもその傾向は一層拡大するものと思われる。

(國學院大学 文学部)

Folklore and Researches in Cities

KURAIISHI Tadahiko

One of the problems that arises when considering the relations between the folklore and city is how to define the city. In this paper, it is thought that a city is a concept set against a village and, fundamentally, it can be grasped by the spatial recognition. Although a city and a village are not always set against with each other, I would like to position them that they are opposed with each other in order to make clear the nature of a city. When a space of a city is considered based on such assumption, there are various spaces different in nature and it can be thought that those spaces combine together to form a city. A folk life in such city may be grasped from the aspect of changes based on the historical interest and from the aspect of event analysis of the actual life based on the social interest.

The life in a city grasped as such can be considered especially from the lore aspect in the folklore study. In the past, there was a tendency that lores were hard to exist in such city. However, there was a strong tendency that lores that were taken up as subject of the folklore study were set in the subjective framework of the surveyers and researchers. It can be said that the main interest was placed on villages and the framework of lore was considered under such foundation. Therefore, the author believes that by taking interest in cities, new lores may be discovered in cities. Those lores may be different from those in village, but certainly, they are also the Japanese lores.